

## 委員会報告

### 表紙写真の選考を終えて

学会誌企画・編集委員会

学会誌第 88 巻の表紙写真を募集（テーマ：農業（水利）施設・構造物とそれらに支えられた農地・地域の景観など：現代の最新技術と苦勞が垣間見える造形美・用の美など、2019 年 9 月 30 日締切）したところ、46 点の応募がありました。11 月 12 日に審査委員会（委員長・柳本尚規東京造形大学名誉教授）を開催し、12 点を選定したので、ここに報告します。

学会誌企画・編集委員会では、学会誌第 89 巻（2021 年発行）も皆さまからの応募写真で表紙を飾ることとし、表紙写真を募集しています。

募集の趣旨および応募方法の詳細は、本誌会告（84 ページ）をご覧ください。たくさんのご応募をお待ちしております。

#### 講評

柳本 尚規（東京造形大学名誉教授）

小学生も低学年の子に辞書をプレゼントする約束をした。早速書店に行って実見に及んだが、数々の辞書に並んで子供向けの百科事典的な図書にも目移りがした。楽しくてしばらくそちらの方に入れ込んでしまった。そしてふと気付いたことがある。

それは、百科事典は専門的な項目が縦割りに集められるべきものではない、ということ。言い換えれば、個別の専門家が書いた項目が並ぶ事典はつまらない、ということで、どうも百科事典の魅力は百科的関心・知識の専門家によってもたらされるものなのだろうということだった。百科という専門分野がなければならぬのだということになる。

山川、田畑を見ても、そこへ指す夕日の景色がすばらしいという観光の専門的感想、ダム<sup>ダム</sup>の構造を表示する専門、耕地法の特徴を解説する専門、栽培されるも

のの味覚的、生産的感想の専門、とそういうのではなく、一つの人格で世界・風景を見渡すような専門分野があるべきなんだろうという感想に至った。

かつてはそういう人や学問の領域が確かにあった。今はそういうのは雑学だと下に見られる。しかし私は、かつて信頼する先生に「雑」の意味は「世界・森羅万象」ということ。だから始め、大学や研究所の論文誌は「紀要」ではなく「雑誌」と言ったのだということ。それがいつしか下世話な意味になってしまっているけれど、「雑学」、「雑談」はとても大事なことなのだから覚えておきなさいと言われたのだ。

書店であれこれ見比べていて、スミソニアン博物館監修の百科事典的画集のとりこになってしまった。まさに、その監修は百科を専門とする意思で成されている。百科の専門とは何でも知っているということではない、そういう視点から見れば個別の現象も違って見えるという、そういうもう一つの専門的視点である。

そんなとき、新聞記事に、近年における「読解力の低下が激しい。世界の国々の中でもそれが日本では著しい」というのがあった。

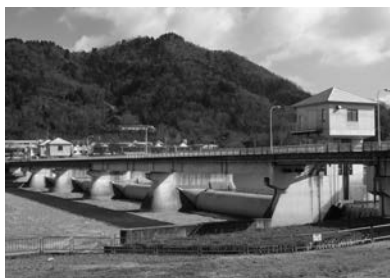
「知識はネットで得られるが知識よりも知恵を出して事態を突破する力が求められている」と、この調査機関の担当者が言っているという。私は「雑」や「百科」の大事さをそこに重ねて読んだのだと思う。

だからあらためて農業などの施設には知恵が溢れている、知恵に頼ろうとする気持ちが溢れていることを私は思った。

知恵、つまり百科的視点の専門性があれば今回もまたたくさん写真をどんなに豊かに見て語るができるだろうかとも思った。写真に写っている施設や環境は知恵を鍛えなければならない、そのための教材のように思えてきたのである。

## 第88巻表紙写真入選作品

1号



地域の大堰（石部頭首工）（北川 孝）

この施設はゴム製の堰。風船のように膨らませて川の水をせき止め、導水路の高さまで水面を上げて水を流す装置とのこと。膨らませると中の高さは3mを超え、これは立派な通路になる。左岸、右岸にはそれぞれ魚道を持ち、遊泳魚から底生魚までさまざまな川の魚を守っている。ウグイのような泳ぎの得意な魚、そうでなく餌が近づくのをじっと待つ魚がいるのだそうで、そうした多様な生き方を守っているのだと思うと、人間社会にもこうした堰が各所にあればと、ゴムの柔らかな質感を見て思えてくる。

人の作るものは、必ず人が思うところを体現することになる。写真の大堰を見ていると発想の源も想像できて楽しい。

川の施設はいつも人間の仕草や表情に似ている。さりげない一枚の写真がそう思わせるのだから、風に吹かれて実際にこの堰を眺めれば、いっそう親しい感覚をかき立てられることだろう。

2号



取水口（岩田幸良）

宍道湖西岸は広く平坦で有力な農業地帯。だが低地のため、湛水被害が頻発し、加えて湖に注ぐ河川からの取水が難しく、上流で取水、導水路を経て写真のような取水口を離れたところに設けなければならなかったという。

じつに素材、実直を絵に描いたような姿だが、それはその施設の日常性を物語っているようにも見え、ケレンなくただ決まった用をなす日常の使命を負った姿である。

農業施設にはこういう路傍の石のような施設が多い。名付けられもしない草花のような施設。人間社会にだってこうしたものは数知れずあるので、この取水口の表情を見ているとその自然なたたずまいに気持ちか和む。

夕日を浴びた宍道湖の姿はあまりにも有名だが、その周囲の生活を彷彿させるこうした写真は、私たちの記憶に蓄えられて宍道湖を巡る世界の広さを思わせる力の源となる。飾りのないものの存在感は力強い。

3号

太陽の温もり 千ヶ滝湯川用水水路  
(才川知利)

金魚鉢の水かえでは、いったん別の容器に水を入れて陽と空気に十分に晒してからにせよと言われた。そうすることによって水にさらに豊かな滋養を含ませることができるからなのだろう。日差しを浴び深呼吸をするのは、人の体だけでなく生命あるものすべてに肝要なこと。

森の中を清々と流れる水は命そのものだと感じさせるこの写真は、言葉では受け取れきれない、だから目に覚えさせる感覚も私たちは持っているのだということを実感させる。

浅間山からの冷たい水を、浅く広く作られた用水路をゆっくり流して温めるといふこの装置は、事実、豊かな水稲を可能にしているのだとのこと。水田にたどり着くまでにかかれこれ5度近くも水温が上がるというのだから、太陽の恵み、それを十分に受け取ろうとするこの工夫に、見るものの気持ちの温度も上げられることだ。

4号



村の堰（北川 孝）

琵琶湖畔の彦根から少し内に入ったあたりは広い田舎がいっぱい広がっている。その中心にあるのが甲良町で、その町外れに鈴鹿山脈から流れてくる水を運ぶ犬上川が、堰を越えて激しく流れたり、溜まっているかと思えるほど緩やかに流れたりと、さまざまな表情を見せる。

この写真はそうした川の姿を模型のように見せている。意匠を凝らした堰を越える流れ、ともに音を奏でるかのような小さな吐水口、そして横には魚道の流れ、もちろん向こうはいったん休息する水のたまり場。それらのさまざまな表情はあたり帯に水路を巡らす技術の舞台裏のようである。

水路の中にあるような町では、どこにいても水の音が聞こえる。それは気持ちに落ち着きをもたらす。堰の施設が、あたり帯の生活環境を言葉を借りずにずっと教えてくれる、巧みな写真であることにも気付かされる。

5号



大町大池藤まつり（合田 弘）

兵庫県のほぼ中央、雲海に浮かぶ竹田城跡や生野銀山の産業遺跡で知られる朝来市にある大町大池は、但馬地域最大の農業用ため池。

その堤体の真下には藤の花の公園がつくられている。広大な駐車場も用意されて季節には大勢の観光客が足を運ぶという。集う人々が見上げる空にあの郷愁の鯉のぼり。

藤棚を芝居舞台のような見栄えだとすると、風に翻る鯉のぼりは舞台上の元気な演技者そのもの。

黄河の竜門の滝を登り切れたのは鯉だけだった。ゆえにその鯉のように健康であれ、世に出てよの「登竜門」という言葉が生まれたそうだが、今ではみんなの平安を願う家族の数だけ吹き流す流儀が一般的になった。その伝で言えば、写真の堤体上の鯉の行列は地域全体の健康を願う気持ちの表れと見える。そして下方には端正に形作られた藤棚とそこからたれる藤花の匂い。風、香りが漂う写真だ。

6号



曾根沼干拓（北川 孝）

大戦後の復興事業は大規模な干拓事業が柱の一つになっていた。青森の十三湖、秋田の八郎潟、千葉の印旛沼など各地に干拓の記録を確かめることができる。いずれも長期に及んだ工事。1950年代初頭から70年に近くなるまで干拓事業は絶えなかったと理解できる。

琵琶湖の内湖の曾根沼の干拓もその一つ。これは県管干拓だったが曾根沼の南部分から全体の8割近くを埋め立てて水田とした。

干拓地は、特有の正確に区画された光景になる。写真は曾根沼背後の荒神山からとか。下って北を見れば琵琶湖北の伊吹山も望める。

広く写っている琵琶湖もほかに比べればカスピ海の500分の1、ミシガン湖の100分の1くらい。それでも私たちに海にも見える。風土がさまざまな自然観や価値観をつくるのだということに頷ける。

確かに写真のように琵琶湖周辺はよく霞んでいて。これもまた私たちの風景観をつくるだろう。四角い区画の水田と湖の写真が、さまざまな想像を膨らませてくれる。

7号



沖永良部の農地（平 瑞樹）

この美しい風景は文字どおり天の配剤、神の計らい。風や空気、そして海の真中に配置された点のような住まう場所は、人間の能力ではつくれない。ヒマラヤのような厳しく活動した姿を思えば、ここは地球活動の休息の場、とさえ思えてくる世界だ。

こういう場所で水が不可欠な農業は成り立つのかと思うのは、水は山から下る河川によって運ばれるものだと思込んでいるからで、狭い島内に降った貴重な雨は琉球石灰岩の隙間をすり抜け、ここでは、水を透しにくい地層岩盤を利用した地下ダムをつくって、そこから水をくみ上げ畑地へ散水する方法がとられているとのこと。道理で水路も写真には見えない。

温暖な気候と適度な降雨（とはいえこのところの台風の降雨は適度ではないが）で農業にはきわめて適した環境ようだ。サトウキビをはじめ、馬鈴薯、南瓜、花卉栽培が盛んだという。自然と人為をジオラマのように見せるこの写真は見飽きさせない。

8号



水どう宝（島をはぐくむ宝の水）  
（鹿児島県）

沖永良部島の農業用水事情が一見して分かる写真。強い日差し、霞のない空間の澄明さ。生育するサトウキビ。そこへ地下ダムからくみ上げられた宝の水。

このサトウキビを搾って黒糖が作られ、米麹と合わさって黒糖焼酎になる。写真を見ていると、焼酎のその美味しさに酔う人々は、きっとこの奄美群島の美しさの記憶に酔わされるのではないかと思うほどだ。

南隣には与論島、北には徳之島、そして奄美大島。江戸末期には西郷隆盛が流されて一年有余滞したのだそうだが、流された場所も風と光に恵まれたこの場所であれば、むしろ気力を養うのに格好ではなかったらどうかと、当時の生活環境の不便さを顧みなければ思ってしまう。戦後すぐアメリカの軍政下に入ったが、沖縄返還に20年近く先立って日本復帰した島。自然を謳歌するような散水器からの水は大地の気持ちのほとばしりのようだ。

9号



みまき大池（才川知利）

御牧ヶ原台地は、地図を見れば一目瞭然、周りを河川に囲まれてはいるが典型的な河岸段丘場にある台地。川から上に平坦な部分と傾斜が急な崖とが交互に現れ、そのてっぺんにある台地だ。

そこには当然水がない。だから蓼科山腹の女神湖をはじめとする湧水群から遠路遙かに水を引いて大小数々のため池をつくった。その数は200とも400とも言われたそう。数がこんなにアバウトなのは、小規模な農作を成す意志がそれぞれにため池を実現していたことを示すが、みまき大池はあたりの数十のため池を統合してできたいわば意志の連携の産物である。

これによって稲作や特産馬鈴薯の栽培が安定的に可能となった。これはつい近年のことだそう。

蓼科山から引いてできた池の水面に浅間山の山稜が映る。その昔は朝廷の御料牧場一辺倒だった台地がこうして水に親しむ農地に変わった。そういう風景を望んだときの気持ちの中によみがえる時間の感覚が伝わってくるが、写真にはこういう言葉の外にある感覚を呼び覚ます力がある。

10号



大地に畑かん・潤う農業、生農地の水で満ちあふれる「荒瀬ダム」

（九州農政局肝属中部農業水利事業所）

ダムは多くが山地で占められる大隅半島の肝属地域の農業生産を支える灌漑施設。荒瀬川の中腹につくられた。これによって肝付町や鹿屋市の農地が潤われて、かつてはサツマイモや畜産用牧草の栽培に限られていた畑作から、市場の多様な可能性を持つ野菜の生産への転換が可能になったのだという。

目に圧巻なのはこの城を思わせる石造りのダム壁だが、水をせき止めるこの壁は断面の形が富士山のようになっていて、中心部が遮水性の高い粘土状の層で、その外側に粗い素材、その外側にもう一つ花崗岩を砕いた層を作り、そして一番外側に大きな花崗岩の壁を組み上げたというつくりだそう。

城壁に似て、石の持つ強固さへの信頼は事実だろうが、視覚的にも石は強固な建材であると同時に心理的にも有効な建材であることがよく分かる。自然のまっただ中におかれるこうした強さを象徴とする施設の存在は頼もしく美しい。

11号



潮止堰（岩田幸良）

この潮止堰でもコンクリートや鋼鉄ではなくゴム製のバルーン堰を擁しているのは、建設コストの削減のメリットを図ってということだそう。一言でゴム製というが、こうした用途のためにゴムを原材料にした新たな資材が工夫されているのだろう。

何しろ灌漑水に塩水が混じらないようにする、水稲栽培には禁忌な塩害防止のための施設である。

それというのも宍道湖と中海は日本の代表的な汽水湖である。一方、水産業の側から見れば汽水域は豊かな漁場。これも天の配剤と受け止めて塩水と淡水の往来を守ってやらねばならないだろう。写真はそうした感覚をてんたんと表している様子が好感が持てる。

12号



風の川代ダム（近田昌樹）

改元を機に市名が「篠山」から「丹波篠山」に変わったのには、何かにつけ丹波産といわれる丹波の核心は篠山なのだとあらためて宣言する動機があったのだという。

この兵庫県中央部、神戸の北にある篠山は古くから大阪圏への交通路の要としても独立した文化、経済圏となっていたようだ。デカンショ節でも有名なのだが、この盆踊り唄は、居合わせた一高生が気に入って東京に帰ってから歌いまくって蔓延したという話も愉快だ。

写真の川代ダムはひっそりとたたずんでいるが、国道から近く、脇の道はサイクリングや散歩に適し、いつも人々の目に触れる場所にある。大きな4つのゲートから落とされる水は滝のようにいつも同じ水流の姿を見せて、見はじめれば時を忘れさせるだろう。

水はどんな形状の器に入れてもそれを満たす。導けばそのとおりに従ってくれる。いまは静かにダムに集められる農業用水としての篠山川だが、ゲートの働きが忙しくなる可能性、水がエネルギーを爆発させるときもある。ダムのゲートはいつもそのことを気にしているだろう。自然の力の予測不能さを恐れているだろうとも見えてくる。水を調節する装置、設備は、いつもそういう事態に待っている。それが私たちに擬人化した思いを想像させるのである。